

保育者のファッションに関する最近の動向

○菊地幹（船堀中央保育園） 澤田圭司（船堀中央保育園）

1. 研究の背景と目的

ファッションの多様化が言われて久しい。ここでいうファッションとは服装や髪形、化粧など外見上の特性を指すものと考えられるが、価値観やライフスタイルの多様化・個性化に伴う自己表現やアイデンティティの確立のためのファッション志向の高まりは、近年の傾向として社会全体に顕著に観察される。ファッションの変遷について、藪田¹は「ファッションはその国の歴史、文化、思想、そして社会情勢と共に密接なつながりをもって展開していくものである。その時代の感覚であり、すべてに共通した感情、つまり共感がなければファッションはあり得ない」と述べているが、同じく特定の社会集団におけるファッションのあり方についても、時代ごとの共通する感覚に基づいて決定されるものと考えられる。

本報では、そうした感覚や価値観の変遷に伴い多様化する保育者のファッションに関する最近の動向について、先行研究や戦後の保育史を紐解きながら、保育者の社会的役割や専門性の変遷との関係性をキーワードにまとめることを目的とする。

2. 先行研究から

保育者のファッションについては、大きく分けて「仕事着」と「ふだん着」の二側面が考えられる。三塚²は仕事着としての保育者の服装について、「一日のうちで最も長い時間身に付けている衣服」であり、「労働に適し、健康とからだをまもり、安全で働きやすいことが必要条件である」としている。このように、主に機能性の観点からファッションを見る前者の視点に対して、後者は「おしゃれ」や「個性的」であること、すなわちデザイン性を重視する視点とも考えられる。両者は相互補完的な位置づけであり、これら機能性とデザイン性の両立が課題であるにも関わらず、後者の視点から保育者のファッションについて論じた先行研究は僅少である。

保育者のファッションの変遷については、職業としての保育士をめぐる社会情勢の変化や資格の法制化の影響も考えられる。同じく三塚³は戦後の保育史を紐解きながら、女性の地位の向上や社会進出に伴う保育者の服装の変化について詳説している。これによると、『子どもらしさ』とか『女らしさ』が強調され、労働やくらしの現実から乖離した教育活動が支配的な保育者の服装は旧態依然として、「労働の実態からかけはなれた画一的で管理主義的」な傾向に偏りがちであるとされる。ここからは長年の間、女性の仕事とされてきた保育職の社会的地位の低迷と現場の保育者の苦悩が伺われる。

男女共同参画の進展に伴う男性保育士の増加や保育士の国家資格化に伴う社会的地位の向上に起因する影響も考えられる。菊地⁴は、男性保育士の増加に伴う女性保育者の意識変化に着目し、「それまでの画一的な男性イメージや性別役割分業観から脱却し、「男性的役割と女性的役割が融合され、真の意味で個性を活かした保育ができるようになる」と、その可能性を示唆している。これらの先行研究から、保育者の社会的役割や専門性の変遷が、そのファッションの変遷と多様化に与えてきた影響が伺える。

3. ヒアリング調査結果から

これらの先行研究をもとに、2011年12月に都内にある民間認可保育所に在勤の女性保育士5名を対象にヒアリング調査を行った結果の概要を以下に示した。なお、調査対象者の選定にあたっては、なるべく多様な条件とするためそれぞれ在籍園の異なる対象者を選定するとともに、経験年数および役職を考慮した。また、ヒアリング内容については、入職当時から現在までの保育者としての自身の服装やファッションの変遷ならびに、これに対する意見や考え方を中心に調査を行い、当時の写真がある場合は予め提供を依頼した。

●保育士A（経験年数30年、役職：主任）

1980年当時は事務服のような制服だった。数年後、園児の制服の廃止に伴い保育者の服装も変化した。その後は、上はTシャツやトレーナーにエプロンかスモッグを重ね着、下はキュロットやパンタロンという活動的な服装が主流だったが、ジーンズなどの作業着やだらしなな格好は園長の方針で禁止されていた。



写真1 制服(左・1980年)ノエプロンにパンタロン(右・1985年)

●保育士B（経験年数20年、役職：主任）

入職した頃（1990年頃）は保育士の服装といえば保育業者の販売するエプロンにジャージという没個性的なものしかなかった。保育雑誌にはおしゃれな保育者の特集もあったが、当時の園長や主任保育士に伝えても「おしゃれなんて我慢すべき」という否定的な反応。同年代の保育者も「ダサイけれど仕方ない」と我慢していた。園長先生が変わって個性的な服装が許されたときは本当に嬉しかった。



写真2 ジャージにエプロン(左)ノ個性的な保育着(右)

●保育士C（経験年数20年、役職：リーダー）

園長先生が先進的な考え方の持ち主で、「子どもの手本となる保育者は、保育中も身だしなみとおしゃれに気を遣うべき」とジャージの着用は原則禁止だった。当時は珍しかったお揃いのトレーナーやピンク色のエプロンを発注してお散歩で着ていたら近所の保育園も真似をし始め、毎年新しい色で作直すなどお互いにファッションを競い合っていた。



写真3 お揃いのトレーナー(左)とピンクのエプロン(右)・1990年

●保育士D（経験年数15年、役職：リーダー）

平成12年（2000年）の（保育所）保育指針改定の頃から、子ども一人ひとりの個性や自主性を尊重する保育の提唱とあわせて、「保育者も自由な服装をすべき」という声があがった。これに伴って保育着もジーンズやTシャツなど普段着に近いものになり、エプロンは食事介助やクッキング活動のときだけ、ジャージも運動会などを除いて着る職員はいなくなった。



写真4 保育着(左)とクッキング用のエプロン(右)・2005年

●保育士E（経験年数5年）

入職当時から身だしなみには気をつけている。化粧はナチュラルメイクで、Tシャツやジーンズのようなラフな格好でも清潔感のある服装を心がけている。髪型を変えた日など、子どもや親に「似合うね」と言われると嬉しいし、自然と笑顔になれる。他の保育園に就職した友人から「支給のジャージとエプロンばかりでおしゃれなんて気にしてられない」と聞くと、保育士として、また一人の大人として子どもたちの見本となるよう意識を持ち続けることの大切さを改めて実感するし、服装や気の持ちようで仕事のやり甲斐も変わる気がする。



写真5 ラフでも清潔感のある保育の服装(左右)

4. 結論と考察

先行研究から、保育者の社会的地位の向上や性別役割分業意識からの脱却に伴うファッションの多様化・個性化の傾向が明らかとなった。しかしながら、併せて実施したヒアリング調査結果からは、現場に依然として残る種々の固定観念が、保育者の自由な服装・ファッションによる個性の表現を妨げている可能性も示唆された。忍耐と献身に代表される性別役割分業観や、これに端を発する保育蔑視の職業観が、形を変えて保育者の個性を抑圧し、保育という仕事へのモチベーションおよび保育者の社会的地位の向上の障害となっている負の連鎖の存在も考えられる。これらは前述のように、わが国の保育を取り巻く歴史的背景、すなわち男女共同参画につながる戦後日本の女性政策や民主化政策の影響を受けており、根深い社会問題としての側面も考えられる。

保育所保育指針に謳われた、一人ひとりの子どもの個性や主体性を尊重した保育の実現のためにも、同じく一人ひとりの保育者が各々の個性を活かして主体的に子どもたちと関わる環境の整備が不可欠と考えられる。従来の因習的な性別観や職業観に囚われない、エビデンスに基づく保育者のファッションの提案が急務と考えられる。

¹ 藪田文子(1974)「戦後ファッションについての一考察—変遷のおもむき」信愛紀要 14, p. 85

² 三塚タケオ(1984)「服装の社会科学(一)—保育労働者の仕事着」同志社大学人文学会 1984, pp. 56-57

³ 同上, pp. 59-60

⁴ 菊地政隆(2010)「男性保育者を取り巻く近年の保育現場の動向と課題」淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要 (17), pp. 238-240